十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉓2222
©十勝毎日新聞社 1988

進む宇宙開発

スペースポート調査団同行記

……2

ツアーに長蛇の列

〝宇宙観光〟十分に成立

発射直前の興奮

ケネディSC

ガイドの小林克己さんは「チャレンジャーの事故後は死んだように静かでした。それだけに街、いや国民全体が今回にかける期待は大きく、同じ市にあるディズニーランドに行くのを取りやめてここに来る人も多い」と説明。地元紙のオーランド・ヘラルド紙はB発射台だ。

☆――3.2キロ先でストップ

ただ、残念ながら時期が時期。打ち上げ直前ということで、私たちも行けたのは二キロ（約三・二キ）離れた地点までだった。しかもシャトルの反対側。高さ約百㍍の発射台に取り付けられた赤い外部燃料タンク、固体燃料補助ロケットが豆粒大に見えただけで、シャトルはベールに隠されていた。

HOPEやスペースプレーンの概念設計に取り組んでいる富士重工航空機技術本部宇宙技術室の永尾陽典担当係長は「シャトルのタイルの部分を間近に見て研究したかったのに」とくやしそう。遠くに見える発射台から白い水蒸気をたなびかせながら飛び立つシャトルの姿を思い描きながら離れざるを得なかった。

サッカー場の半分の面積を持つシャトル運搬車や高さ約百㍍の組み立て工場なども要所要所にロープが張られ、だれかれとなく近づくだけで連転手兼ガイドから注意を受ける。職員のピリピリした雰囲気を感じた。

シャトル計画が始まる一年前の五十四年にケネディスペースセンターを訪れている日産自動車宇宙航空事業部研究実験部（ラムロケットの研究実験）の二宮一芳部長は「あの時とはだいぶ空気が変わって

☆――打ち上げには50万人

敷地は六万六千五百五十二㍍ととにかく広大。頭の中で大樹町の予定地と重ね合わせてみる。横で大谷さんが「元宇宙飛行士のジョン・アレン氏は〝ケネディは沼などが多く、大樹町と似ている〟と言った通り。ハイテク産業が進出している一方で、〝宇宙観光〟も十分に成り立っている。実際にこの地に立って北海道の構想は実現可能だということを十分に感じとれた」と四方を見渡しながら話しかけてきた。

オーランドの人口は十六万人。この八年間、五、六％ずつ人口が増加している。後で知ったのだが、ディスカバリー打ち上げ時は五十万人の観客が詰めかけたという。大樹の青い空に日本版スペースシャトルの打ち上がるのを夢見ながら、発射前の興奮が漂うケネディスペースセンターを後にした。

（近藤　政晴記者）

（つづく）

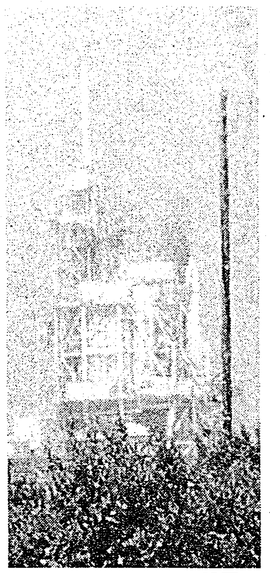
チャレンジャーの事故から二年八カ月、宇宙開発再生への米国民の期待は大きく、それだけにNASA関係者のプレッシャーは相当なものだった。今回のメンバーの一人、道参事監室主査の大谷謙一さんの紹介で、奥さんの満華さんが札幌出身というドゥアイト・F・ハスラさんに会った。

☆――ディズニーよりも…

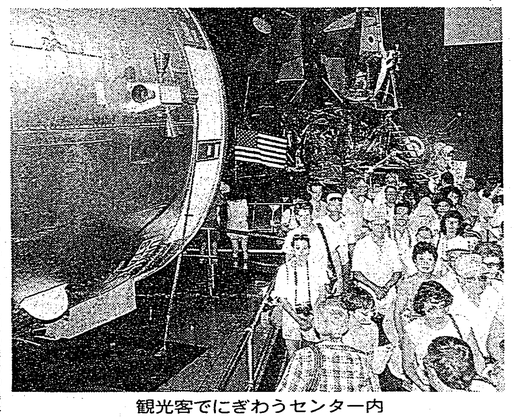
ヒューストンにあるジョンソンスペースセンターで乗組員の人選などの担当者だが、「三十二カ月間、二十九日の打ち上げの一日のために過ごしたようなもの。事故後はしばらくの間、する仕事もなく、その待つ間がたまらなかった。もし今回失敗したら宇宙開発計画は五、六年、遅れただろう。（打ち上げが）六月から九月に延びたのもエンジンのバルブなどを何回もチェックしたから。本当に慎重を期した」という話にも関係者の苦しかった気持ちが表れていた。

調査団の一行がスペースシャトル再生一号機「ディスカバリー」の打ち上げ基地、フロリダ州オーランドのケネディスペースセンターを訪れた二週間前から特集記事を始めていた。

それを裏付けるかのようにバスツアーの出発点・スペースポートUSAのチケット売り場には横十列で幾重にも列が出来ていた。ロケット展示場ではあちこちで家族連れが記念撮影している。だが、多くの人のお目当ては何といっても本番を目前に控え、シャトルが据え付けられた第39



ディスカバリーが設置され、打ち上げを待つだけの発射台



観光客でにぎわうセンター内